

会報



◆ 会員校の特色ある取り組みの紹介

「瀬戸内イキイキプロジェクト」

大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト
「地島における防災・減災活動」



- ◆ 2024 年度事業活動報告
- ◆ 2024 年度国際学会発表助成 論文要旨
- ◆ 理事会報告
- ◆ 事務局からのお知らせ
- ◆ 編集後記

大学教育委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○安酸 史子 日本赤十字北海道看護大学 江川 隆子 関西看護医療大学
 太田 勝正 東都大学 小原 泉 自治医科大学
 （委員）前田 樹海 東京有明医療大学

1. 研修会の開催

（1）新任教員向け研修会「大学教育とは」

目的：私立大学の教職員として基本的に知っておかなくてはならない考え方や、教育課程、私立大学法改革に至る経緯や置かれている現状について学ぶ。

講師：島袋 香子 氏（北里大学）

日時：2024年8月3日（土）10：00～14：20

開催方法：（当日）会場開催、Zoom ウェビナーを用いたライブ配信（講演のみ）

（後日）オンデマンド配信

プログラム：

（午前の部）

10：00～10：10 開会挨拶

10：10～11：10 講演「私立看護系大学を理解する」
 講師：島袋 香子 氏

11：10～11：20 質疑応答

11：20～12：20 休憩

（午後の部）※午後の部は会場開催のみ

12：20～13：20 グループワーク

13：20～14：15 発表・質疑応答

14：15～14：20 閉会挨拶

当日参加者：会場参加 16 名、Zoom 参加 73 名、
 グループワーク参加 16 名

動画配信期間：2024年8月8日～11月8日

動画視聴回数：529 回

講演概要



「私立看護系大学を理解する」

島袋 香子
 北里大学

島袋香子先生によるご講演「私立看護系大学を理解する」では、私立大学を設置運営する主体である学校法人に関する主な法律や私学における教員の責務と役割について解説がなされた。教育基本法や学校基本法は学校組織・教育のあり方についての規律であるが、学校法人においては私立学校法や私立学校振興助成法など学校法人の組織・会計・補助金等に関する規律も知る必要があり、それぞれの法律の中で大学や私学についてどのように規定されているのか、ポイントとなる事項が説明された。私立学校法の目的に「自主性を重んじ、公共性を高める」と記されているのは、大学の理念に基づき特性を活かして、誰に対しても開かれている必要性を意味しているとの説明があり、私立大学のあり方について参加者の理解が深まったと思われる。

私学における教員の責務と役割についても、私立学校法における記載をもとに「自主的な運営基盤の強化」、「教育の質の向上」、「運営の透明性の確保」といった主要事項の解説があった。特に「教育の質の向上」については、3つのP（DP：ディプロマポリシー、CP：カリキュラムポリシー、AP：アドミッションポリシー）の実質化から内部質保証システムを機能させ、学生成果の把握・可視化していく意義が説明された。参加者からのアンケートには「大学教育に関連する法的な根拠や制度、仕組みを知ることができた。」「大学教育ならびに私立大学の役割について学ぶことができ、これからの教員としての姿勢を考えることができた。」等のコメントがあり、アンケート回答者の99%が内容について「大変満足」あるいは「満足」と回答していた。

午後のグループワークでは、4つのグループに分かれて、島袋先生のご講演内容から学んだこと、気づいたことなどを各グループで自由に意見交換していただいた。1時間の意見交換の後、各グループからの発表と質疑応答の時間を55分設けた。大学教員のキャリア形成、学生との向き合い方、臨地の看護職とは異なる教員の役割・機能に関する困難、教育の質の確保方法などについて活発に話し合われたことが報告された。参加者からのアンケートでは、「日頃のモヤモヤが共有いただけ、示唆が得られた。」「このような機会がなければ繋がることのできなかった先生方と知り合うことができ、とてもよかった。」「普段は学務に追われて教育についてじっくり話し合う時間をもつことが難しいが、他大学の先生方と率直に話し合うことができ、自分がジレンマを感じている事柄を認識することができた。本日気づいた問題意識に向き合い、さらに教育・研究能力を向上させたいと思った。」など、満足度の高いグループワークであったことが記されていた。

進行を担当した立場ではあるが、グループワークで語られた新任教員の困難感や若手の教育・研究者を支援する上で得るところがあった。参加者の反応から、新任教員を対象とし、大学教育とは何かを学ぶ本研修は大変有意義といえる。今後も、私立の看護系大学の新任教員を支援する機会を継続的に提供していきたいと考える。

報告者：小原 泉

（2）喫緊の課題についての研修会「看護系大学における特別な支援を必要とする学生への教育支援の実践」

目的：特別な支援を要する発達障害傾向の看護学生の特徴や具体的な教育支援の実践を学び、教職員に必要な能力を向上させるための示唆を得る。

講師：西村 優紀美 氏（元富山大学 保健管理センター）

准教授)

ファシリテーター：日高艶子（聖マリア学院大学）、
小浜さつき（聖マリア学院大学）、
北川明（順天堂大学）

日時：2025年1月25日（土）10：00～14：30

開催方法：（当日）会場開催、Zoom ウェビナーを用いた
ライブ配信（講演のみ）

（後日）オンデマンド配信

プログラム：

（午前の部）

10：00～10：10 開会挨拶

10：10～11：10 講演

11：10～11：30 質疑応答

11：30～12：30 休憩

（午後の部）※午後の部は会場開催のみ

12：30～14：00 事例検討会

14：00～14：25 発表・質疑応答

14：25～14：30 閉会挨拶

当日参加者：会場参加14名、Zoom参加80名、
グループワーク参加15名

動画配信期間：2025年2月4日～5月4日

動画視聴回数：66回（4月10日時点）

講演概要



「看護系大学における特別な支援を必要とする学生への教育支援の実例」

西村 優紀美

元 富山大学 保健管理センター 准教授

合理的配慮が義務化された状況の中、各大学における喫緊の課題として特別な支援を要する発達障害傾向の看護学生の特徴や具体的な教育支援の実例を学び、教職員に必要な能力を向上させるための示唆を得ることを目的とし、ハイブリッドによる研修会を開催した。会場参加14名、Zoom参加80名であった。午前中の西村優紀美氏（元富山大学 保健管理センター 准教授）によるご講演「看護系大学における特別な支援を必要とする学生への教育支援の実例」では、1. 障害学生支援、2. 特別な支援を必要とする学生① 発達障害の特性がある学生に対する教育支援・合理的配慮、② 精神障害の診断がある学生に対する合理的配慮、3. 資格取得に係る学部学科で懸念されること、4. 実習における支援のポイントについて解説された。最初に障害のある学生の修学支援に関する検討会報告の第三次まとめの対象範囲や大学等に求められる取組、財政支援について丁寧で紹介された。また合理的配慮の提供について具体的に解説された。資料にはより詳しく調べるためのQRコードも掲載された。最後に発達障害のある学生の特性と学習支援について、事例を紹介しながら具体的に解説された。

午後の事例検討会では、ファシリテーターとして、日高艶子氏（聖マリア学院大学）、小浜さつき氏（聖マリア学院大学）、北川明氏（順天堂大学）に入ってもらい、対面参加者15人が3グループに分かれて、ファシリテーターから提供された事例をもとに事例検討会を行った。1時間半の事例検討会の後に約30分の発表と質疑応答を行った。

アンケートでは、西村氏の講演について、「どこまでが合理的配慮か」や「何が合理的配慮か」について、非常に納得がいきました。」「学生の特性に合わせた支援の具体をご提示いただき、大変参考になりました。」等、高評価であった。現地の参加者は少人数であったが、事例検討会に参加した人からは、他大学の先生方と話し合うことで大変勉強になったという感想であった。次回希望するテーマについては、発達障害のある学生支援について継続して実施してほしいとの希望が多かった。

進行役を担当した立場からは、合理的配慮が義務化した状況の中で、発達障害傾向のある学生への対応でかなり困難さを実感している大学教員が多いことが実感でき、今後も特別な支援を必要とする学生に関する学習支援についての適切な情報提供と具体的な事例での検討を重ねていく意義を痛感したため、次年度も同様の研修を提供していきたいと考えた。

報告者：安酸 史子

2. 看護学教育教材開発の助成事業の実施に向けた検討

教材（成果物）の著作権や採択方法などの課題があり、まずは協会としての方針を定める必要がある。また、1件あたりの助成額は高額になることが想定され、本協会の財務状況からも急速な実現は難しいとの結論に至った。

3. 教員組織ならびに教員の質と能力向上のための制度についての検討

カナダ・オンタリオ州看護協会の看護師登録制度について情報収集を行った。その中の「過去の犯罪と判決」の申告内容と取り扱いの考え方等をもとに、それらを看護教員採用時に活かす方法について検討を始めた。

4. 委員会の開催

第1回大学教育委員会

日時：2025年2月5日（水）15：00～15：40

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

出席者：太田勝正、小原泉、安酸史子

議題：1) 研修会の振り返り

2) 2024年度事業活動報告について

3) 2025年度事業活動計画案について

4) 今後のスケジュールについて

5) その他

5. 今後の課題

看護学教育を取り巻く社会の変化が激しい中、長期的な事業活動は具体的な計画が立てにくい状況にある。

情報化の変化への対応や新カリキュラムの運用に関する情報を共有し、教育方法の工夫や開発による「教育の質」の更なる向上のための長期計画へと発展させていく年度としたい。又、本協会の会員校である私立大学のもつ多様なニーズを把握し、私学の特色を生かした事業を企画していく必要がある。

研究活動委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○亀井 智子 聖路加国際大学
前川 幸子 甲南女子大学

小松 万喜子 中部大学

1. 研究助成事業

2024年度の看護学研究奨励賞、若手研究者研究助成、国際学会発表助成の募集を4月1日～5月20日に行い、7月14日に選考委員会で選考した結果を第2回定例理事会（7月27日）に提出した。看護学研究奨励賞20件、若手研究者研究助成13件、国際学会発表助成7件を採択することを決定し、8月から助成金の交付を行った。

(1) 2024年度研究助成事業選考委員会の開催

日時：2024年7月14日（日）10：00～12：00

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

出席者：

（理事）麻原きよみ、香春知永、中新美保子、
野末聖香

（選考委員）大坂和可子、杵淵恵美子、小高恵実、
小藪智子、近藤麻理、泊祐子、長松康子、
羽入千悦子、増澤祐子、松岡千代、
三次真理、光永憲香

(2) 若手研究者研究助成成果報告

2024年度若手研究者研究助成採択者（13名）による研究成果報告を行った。

公開期間：2024年9月7日（土）～9月9日（月）の
3日間

公開方法：Web掲載による

公開内容：15分程度の音声付きパワーポイント、抄
録

視聴回数：524回

2. 学術研究および学術研究体制に関する事業

研究セミナー

日時：2024年9月7日（土）13：00～15：10

開催方法：Zoomウェビナーによるライブ配信と
オンデマンド配信

テーマ：「EBNリサーチエビデンスをどう実践に活か
すか」

目的：看護のベストプラクティスを目指し、研究で
明らかにされたエビデンスを実践にどのよう
に活用するか、具体的な方法やアプローチに
ついて学ぶ。

講師：片岡 弥恵子 氏（聖路加国際大学大学院）

プログラム：

13：00～13：10 開会挨拶

13：10～14：40 講演

14：40～15：00 質疑応答

15：00～15：10 閉会挨拶

当日参加者：60名

動画配信期間：2024年9月11日～12月11日

動画視聴回数：307回

講演概要



「EBNリサーチエビデンスを
どう実践に活かすか」

片岡 弥恵子

聖路加国際大学大学院

セミナー参加者からの評価

アンケート回答者は59人（回答率96.7%）であった。
回答者の所属は大学がほとんどで、職位は教授44%
が最も多かったが、准教授・講師・助教といった若手
教員の参加もそれに並んでおり、大学院生からの回答
も得られた。

セミナー参加動機は、「テーマに関心があった」
34%が最も多かった。参加者の満足度は「大変満足」
76%、「満足」24%と全ての回答者が満足と回答して
いた。自由記載からは、内容、運営方法に関するもの
が多く、いずれの評価も高かった。特に「内容がわか
りやすかった」「講師の説明が明確であった」という
ものも多く、「今後具体的にEBNを活用したり、教
育に活かしたい」という記載もあり、参加者にとって
有意義なセミナーであった。

アンケート回答者の特性

① 所属

	人数	割合
大学	57 人	97%
短期大学	2 人	3%
合計	59 人	100%

② 職位

	人数	割合
教授	26 人	44%
准教授	9 人	15%
講師	8 人	14%
助教	12 人	20%
助手	3 人	5%
大学院生	1 人	2%
合計	59 人	100%

③ 参加のきっかけ（複数回答可）

	人数	割合
上司の勧め	9 人	11%
同僚教員の勧め	3 人	4%
テーマに関心があったから	27 人	34%
協会ホームページを見て	13 人	17%
ポスターを見て	1 人	1%
メールを見て	24 人	30%
その他	2 人	3%
合計	79 人	100%

（その他の内容）

大学の勧め、FD 活動の一環として

2) 内容有用性について

	人数	割合
大変役に立った	44 人	74%
役に立った	14 人	24%
あまり役に立たなかった	1 人	2%
役に立たなかった	—	—
合計	59 人	100%

3. 委員会の開催

第1回研究活動委員会

日時：2025 年 1 月 30 日（木）18：00～19：30

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

出席者：亀井智子、小松万喜子、前川幸子

議題：1) 研究セミナーの振り返り

2) 2024 年度事業活動報告について

3) 2025 年度事業活動計画案について

4) 今後のスケジュールについて

5) その他

4. 今後の課題

- ①会員校における看護学研究者の育成のために適正で公正な研究助成事業を推進する。
- ②会員校の教職員のニーズに沿ったセミナーの開催について検討し、研究セミナーを開催する。

参加満足度

1) 内容について

	人数	割合
大満足	44 人	76%
満足	14 人	24%
やや不満足	—	—
不満足	—	—
合計	58 人	100%

国際交流委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○櫻井 しのぶ 順天堂大学
(委員) 中村 敦子 日本赤十字広島看護大学

池松 裕子 日本赤十字九州国際看護大学
若林 律子 順天堂大学

1. 研修会の開催

テーマ：これからの国際交流
ーグローバルな看護人材の育成の現状と展望ー

目的：カリキュラムの過密さや渡航費用の高騰、国際情勢の不安定により看護学生の国際交流が難しくなっている現状を踏まえ、真のグローバル人材についてどのような将来像を描いて育成するのかの示唆を得る。

開催日時：2024年12月14日（土）13：00～15：30

開催方法：Zoom ウェビナーによるライブ配信と
オンデマンド配信

講師：森山 美知子 氏（広島大学 大学院医系科学研究科
成人看護開発学 教授）

西村 直子 氏（大手前大学 国際看護学部 教授）

講演内容：国際交流における日本の看護系大学の役割について

プログラム：

13：00～13：10 開会挨拶

13：10～13：45 講演1

「国際大学ネットワークや JICA を活用したグローバルな看護人材の育成」

13：45～13：55 質疑応答

13：55～14：30 講演2

「自分のいる場所で始めるグローバル：夢は大きく平和貢献」

14：30～14：40 質疑応答

14：40～14：50 休憩

14：50～15：20 シンポジウム

15：20～15：30 閉会挨拶

当日参加者：31名

動画配信期間：2024年12月19日～2025年3月19日

動画視聴回数：214回

講演概要

講演1



「国際大学ネットワークや JICA を活用した
グローバルな看護人材の育成」

森山 美知子

広島大学 大学院医系科学研究科 成人看護開発学
教授

広島大学が進める国際的な人材育成の取り組みについて紹介いただいた。広島大学は、56カ国360機関と大学間協定を結び、さらに22カ所に国際研究教育拠点を有するなど、世界規模での国際連携を推進しており、特に、インターナショナル・ネットワーク・オブ・ユニバーシティーズ（INU）を活用した活動では、異文化理解や平和学習を重視した看護教育を展開していること、サマワークショップでは「災害看護」「医療安全と

看護の質」「看護の国際的な役割」などのテーマを掲げ、学生と教員がディスカッションやシミュレーションを行い、多文化共生を学ぶ機会を提供していることを紹介いただいた。

また、JICA との連携によるユニバーサルヘルスカバレッジ長期研修では、中低所得国の医療人材を育成していること、留学生は日本の高度な医療技術や看護管理を学び、母国での看護発展に貢献していること、英語による授業や学術交流を進め、留学生の受け入れ環境整備に注力していることを紹介いただいた。さらに、留学生たちが学部学生の教育にも関わり、学部学生に身近にグローバル化を感じる工夫をされていることを紹介いただいた。

課題としては、日本人学生の英語力向上や、多文化社会への理解促進、また留学生支援の充実が挙げられた。これらに対し、広島大学ではカリキュラムの改編や英語教育の強化、留学プログラムの拡充に取り組んでおり、今後も国際的な看護人材育成においてリーダーシップを発揮していく方針が示された。

Q&A：講演後の Q&A では、主に日本人学生と留学生間の教育環境の違いや留学生の受け入れに関する課題、そして国際化における助教の役割について質疑応答がされた。日本人学生の語学力不足が課題であり、現在は、留学生と分けた授業をしていることを説明いただいた。また、留学生が広島大学を選ぶ理由については、海外プロジェクトや政府の支援が大きいことが挙げられた。一方で、留学先の選択肢として、世界では日本が三番手となっている現状や、留学生が帰国せず日本で就職するケースの増加も課題として挙げられた。助教の国際化への貢献については、国際共同研究や英語論文の発表が重要であるとし、SNS や学会を活用した国際的なネットワーク構築が推奨された。日本の医療や看護の優れた技術を世界に広め、現地を発展させる取り組みの重要性が強調された。

講演2



「自分のいる場所で始めるグローバル：
夢は大きく平和貢献」

西村 直子

大手前大学 国際看護学部 教授

大手前大学では、2019年に国際看護学部を開設、西村氏は国際看護学部の教育・研究活動に従事し、JBI（Joanna Briggs Institute）センターのディレクターとして、エビデンスに基づく看護の普及に取り組んでおり、ラオスや韓国など海外の教育・医療機関と連携、学生・教員間の国際交流を促進していることを紹介いただいた。また、日本から海外への留学率の低さや、多様性に接する機会が限られている現状が課題であること、同大学では、学生が日常的に異文化に触れる機会を増やすため、短期留学や海外からの受け入れプログラムを実施しているこ

と、特に国際看護学実習では、学生が海外の医療現場で異文化を体験し、言語や文化の壁を乗り越える力を養うことを重視していることを紹介いただいた。また、語学力や異文化理解を看護教育全体に組み込み、すべての教員が多様性教育に関わる仕組みを構築し、領域ごとに「多様性」「国際力」を取り入れた学習モデルを設定、学生の寛容性と実践力を育成していることを紹介いただいた。国際交流の取り組みを通じて、学生が相手国を理解し、友好関係を築くことで、平和への貢献を目指していることや国際社会の中で日本が果たすべき役割を再認識し、看護教育を通じて学生が広い視野と多様性を尊重する姿勢を持つことの重要性について講演いただいた。

Q&A：バディー制度についての質問に対し、国際実習の際に現地大学の学生とペアを組み、滞在中の活動全般をサポートしてもらう仕組みであり、この制度は、日本への留学生の受け入れプログラムでも部分的に採用されており、学生間の交流促進に寄与していることを説明いただいた。次に、国際交流を担当する大学職員の研修についての質問では、特別な研修は行っていないものの、語学力のある職員がその役割を担っていると述べられた。最後に、外国籍の教員が日本の看護大学で国際看護に貢献する方法について、「違い」を強みにすることが重要であること、日本では当たり前とされることを異文化の視点から疑問視し、それを共有することで大きな貢献が可能であると述べられた。

シンポジウム

森山氏と西村氏から看護教育における国際交流や多様性を推進する上での課題と取り組みについて説明いただいた。国際交流を支える資金面について、渡航費や滞在費は基本的に自己負担であり、一部の学生は奨学金制度の支援を受けている現状が共有された。経済的負担が学生の国際経験の制約になることも課題として挙げられた。また、英語力の向上が日本人学生にとって喫緊の課題である一方で、AI 翻訳技術の活用が新たな可能性を開いている点も議論された。

看護実習のあり方については、日本と海外での実習内容の違いが大きく取り上げられた。例えば、スウェーデンの学生は侵襲的な技術を実践できる環境を期待して来日するものの、日本の病院ではそうした機会が限られているため、満足を得られないことが指摘された。また、国際実習に帯同する教員は、学生のサポートや通訳として重要な役割を果たしており、現地の文化や医療体制に応じた柔軟な対応が必要とされていることが説明された。

さらに、留学生の受け入れでは、日本人学生との交流の難しさや文化的なギャップが課題となっており、特に、留学生と日本人学生の交流を深めるための仕組み作りが必要とされ、有志のボランティア活動やバディー制度がその一助となっている現状が報告された。

最後に、多様性や国際性を重視した看護教育の重要性が強調された。社会の国際化が進む中で、看護師が多文化社会で効果的に対応できるスキルを身につけることが不可欠であり、カリキュラム改革や教育方針の見直しが求められていることが共有された。

2. 先駆的な国際交流活動を行っている大学の視察調査等の助成事業

募集期間は9月11日から10月11日、17件の応募があった。

10月12日から10月31日に選考を行い、大阪医科薬科大学、東邦大学（看護学部看護学科）、福岡女学院看護大学の3校を採択することを決定した。

審査方法は、5つの審査項目を定め、優れている（4点）、どちらかと言えば優れている（3点）、どちらかと言えば優れていない（2点）、優れていない（1点）の20点満点で審査（点数化）し評価コメントを検討した。得点（審査人数による平均値）の高い順に採択校を決定した。ただし、自校の申請や利益相反のおそれがある理事・委員は当該申請の選考には加わらなかった。想定を超える数の応募があったため、申請内容より妥当な助成額を検討し、会長へ審査結果を報告し、会長決裁の予備費からの支出を相談の上、採択校を決定した。審査項目は、目的の妥当性（国際交流活動の意義）、看護学への貢献、独創性があり先駆的か、経費の妥当性（計上されている経費を精査）、準備状況・計画実現の可能性の5つとした。

当初より予算計上している200万円に会長決裁の予備費50万円を加えた合計250万円の中で3校への一部助成を決定した。

3. 委員会の開催

第1回国際交流委員会

日時：2024年8月26日（月）18：00～19：00

開催方法：Zoomを用いたWeb開催

出席者：（理事）池松 裕子、櫻井 しのぶ

（委員）中村 敦子、若林 律子

議題：1) 2024年度委員会活動について

2) 研修会について

（1）日時、プログラムについて

（2）講師、講演内容の報告

（3）研修会の当日業務の担当

3) 助成事業について

4) 今後のスケジュール

第2回国際交流委員会

日時：2025年1月29日（水）13：30～15：00

開催方法：Zoomを用いたWeb開催

出席者：（理事）池松 裕子、櫻井 しのぶ

（委員）中村 敦子、若林 律子

議題：1) 研修会の振り返り

2) 2024年度事業活動報告について

3) 2025年度事業活動計画案について

（1）研修会について

（2）助成事業について

4) 今後のスケジュール

5) その他

4. 今後の課題

国際的に活躍できる看護人材の育成にむけた看護学教育のあり方について、情報交換と交流を推進し、グローバル社会のニーズに対応する国際看護教育のあり方及びカリキュラムの体系化について議論を深める。また、地域や医療現場だけではなく、大学においても多様な文化を背景に持つ教職員と相互理解を深め、共に働くために必要な人材育成の展望に向けた議論を進めていく。

大学運営・経営委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○井上 智子 国際医療福祉大学
竹田 恵子 川崎医療福祉大学

岡田 みどり 川崎医療短期大学
永田 智子 慶應義塾大学

1. 研修会の開催

テーマ：学生募集に効果的な大学のブランディングを高めるための戦略

目的：18歳人口減少を受け学生募集のための効果的なブランディングを知る。

開催日時：2024年10月21日（月）13：30～16：40

開催方法：Zoom ウェビナーによるライブ配信と
オンデマンド配信

講師：押田 浩幸氏（株式会社進研アド 営業本部 東京支社長）
飯島 隆介氏（株式会社リクルート リクルート進学総研 研究員）

プログラム：

13：30～13：40 開会

13：40～14：50 講演1

「大学や高校を取り巻く環境の変化」

14：50～15：00 質疑応答

15：00～15：10 休憩

15：10～16：20 講演2

「私立大学のブランディングの
在り方とその重要性について」

16：20～16：30 質疑応答

16：30～16：40 閉会挨拶

当日参加者：144名

動画配信期間：2024年10月23日～2025年1月23日

動画視聴回数：635回

講演概要

井上智子委員長の司会のもと、看護系大学の学生募集に効果的なブランディングに関する、お二人のご講演者による講演が行われた。

講演1



「大学や高校を取り巻く環境の変化」

押田 浩幸

株式会社進研アド 営業本部 東京支社長

押田浩幸氏（株式会社進研アド）からは、「大学・

高校を取り巻く環境の変化について」というテーマでご講演いただいた。まず、受験生マーケットの変化についてデータに基づきご説明いただいた。社会状況の変化に伴い、私立大学の医療系の志望者数は減少傾向が続いており、看護系の志願者数の減少幅も大きいことが示された。また、入試全体をみると年内選抜の比率が高まり一般選抜の競争が緩和していることが示された。これにより、複数大学を併願しなくても合格できることから、受験生の大学調べの動機付けが下がるとのことであった。さらに、高校生の環境をみると、学習指導要領の変更により、より探究的な学びが重視されるようになっており、高校と大学の連携への期待も大きくなっていることが示された。

講演2



「私立大学のブランディングの在り方とその重要性について」

飯島 隆介

株式会社リクルート リクルート進学総研 研究員

飯島隆介氏（株式会社リクルート）からは「私立大学のブランディングの在り方とその重要性について」というテーマでご講演いただいた。リクルートブランド力調査に基づき、各校の知名度と志願度の現状を詳細にご報告いただいたのち、データに基づき、最近の高校生に対する募集戦略についてお話しいただいた。高校生の大学選びにおける情報源が、高校の先生および進学情報サイトが中心であり、自分自身に最適化された情報収集の時代に変化していることが示された。

いずれのご講演においても、高校生による看護系大学への進学志向に働きかけるには、高校入学前からの接点を強化すること、高校生の興味があるテーマや社会課題と「看護」との繋がりを「見える化」すること、各大学で「自分が成長できる」ことを具体的にアピールすること、看護学を学ぶことによるキャリアの拡がりを伝えることなどがポイントとして挙げられた。

質疑応答においては、高校生の進学先決定時期の早まりや、現在の社会情勢下で看護系人気下がって

るという現状やその背景に関する確認が行われるとともに、高大連携の具体的な方法論についてのさらなる情報提供が行われた。最後に、井上委員長より、看護系大学による学びが生涯を通してのキャリア形成につながることを、積極的にアピールしていくことの必要性について改めて確認され、研修を締めくくった。

2. 4年制大学の教育等に関する実態調査の実施と報告書の作成（JANPU との合同）

調査依頼：10月7日に調査票（エクセルファイル）を送付

調査期間：10月15日から12月26日

3. 短期大学の教育等に関する実態調査の実施

調査依頼：10月15日に調査票郵送
10月21日に調査票（エクセルファイル）をメールにて送付

調査期間：10月21日から12月13日

4. 委員会の開催

第1回大学運営・経営委員会

日時：2024年9月4日（水）14：00～14：30

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

出席者：井上 智子、岡田 みどり、竹田 恵子、
永田 智子

議題：1) 2024年度委員会活動について
2) 研修会について
3) 今後のスケジュールについて
4) その他

第2回大学運営・経営委員会

日時：2025年1月28日（火）13：00～13：40

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

出席者：井上 智子、岡田 みどり、竹田 恵子、
永田 智子

議題：1) 研修会の振り返り
2) 2024年度事業活動報告について
3) 2025年度事業活動計画案について
4) 今後のスケジュールについて
5) その他

5. 「看護系大学の教育等に関する実態調査」合同会議

第1回合同会議

日時：2024年4月16日（火）13：00～14：30

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

議題：1) 集計結果・図表の確認
2) 今後のスケジュールと対応
3) 看護系大学に関する実態調査 最終報告書について
4) その他

第2回合同会議

日時：2024年9月4日（水）18：00～18：50

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

議題：1) 各委員会委員の紹介
2) 「2023年度看護系大学に関する調査」内容の変更についての審議
3) 今後の実態調査スケジュールと分析の担当

第3回合同会議

日時：2025年2月17日（月）15：30～16：30

開催方法：Zoomを用いたWeb会議

議題：1) 2023年度看護系大学に関する実態調査（2024年度実施）の集計について
2) 今後の検討事項
3) その他

6. 今後の課題

- 1) 4年制大学および短期大学の教育・危機管理等に関する実態調査結果から、4年制大学および短期大学の運営・経営改善に関する方策を提案する。
- 2) 大学運営・経営に関する研修会を企画し、学校法人の経営戦略等についての情報を発信する。

渉外委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○原 玲子 日本赤十字秋田看護大学 荒木 暁子 東邦大学
 鎌田 佳奈美 摂南大学 洪 愛子 神戸女子大学
 櫻井 しのぶ 順天堂大学

渉外委員会では、看護教育に関する関連省庁や関係団体の動きに関する情報収集及び関連団体との連携活動を行いながら、本協会の発展に向けた取り組みを検討するための活動を行っている。

1. 看護教育の問題提示と看護政策の要望提出

2024年度の要望書の発出に際し、事前に会員校より意見を聴取した。出された意見を踏まえ、自民党厚生労働部会看護問題小委員会（9月10日開催）に、2024年度概算請求に対し下記のとおり看護教育の問題提示と看護政策の要望を行った。

- ・看護教員の養成と雇用および臨地実習施設における教育要員の配置
- ・看護学教育機関ならびに実習施設を含めたICTの活用体制の整備
- ・看護学教育のためのシミュレーション機器等の整備の充実と教育支援の体制整備
- ・看護系大学が使用可能な教材作成や教育支援のためのプラットフォームの構築と構築に向けた調査・研究
- ・地域における「健康危機管理ができる看護人材の育成」のための看護学教育の改革

2. 関係諸団体との連携

8月に、櫻井しのぶ理事が高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会委員に就任、洪愛子理事がJANPU高等教育行政委員会委員に就任した。各委員の活動は次の通りである。

- ・6月14日：JABNE 定時評議員会 Web 会議に島袋香子理事が出席
- ・9月3日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会開催
- ・9月9日：JANPU 高等教育行政委員会 Web 会議開催
- ・9月10日：自民党看護問題小委員会に洪愛子理事、櫻井しのぶ理事が出席
- ・9月19日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会 NP チーム会議に櫻井しのぶ理事が出席
- ・9月30日：小阪佳代氏（日本看護連盟副会長、石田まさひろを応援する会会長）、高原静子氏（日本看護連盟 会長）高橋弘枝氏（公益社団法人日本看護協会

会長）柳谷博幸氏（日本看護連盟常任監事）氏が往訪看護連盟からは、若い看護師、看護学生にも夢のある看護、看護政策への参画を促進させていきたいことや、自民党看護問題小委員会への要望書提出については看護関係の団体との情報連携を進めていきたいとの発言があり、看護問題について話し合った。

- ・10月21日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会に櫻井しのぶ理事が出席
- ・11月1日：JANPU 高等教育行政対策委員会に洪愛子理事が出席
- ・11月29日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会に櫻井しのぶ理事が出席
- ・12月13日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会に櫻井しのぶ理事が出席
- ・12月19日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会に櫻井しのぶ理事が出席
- ・1月17日：日本看護協会新年賀詞交歓会に荒木暁子理事が出席
- ・1月17日：JANPU 高等教育行政対策委員会に洪愛子理事が出席
- ・3月3日：JANPU 高等教育行政対策委員会に洪愛子理事が出席
- ・3月19日：高度実践看護師 APN グランドデザイン委員会に櫻井しのぶ理事が出席

3. 教育学術新聞への掲載

日本私立大学協会が発行する教育学術新聞に令和6年私学関係者「名刺交換」、令和7年私学関係者「名刺交換」に掲載した。

4. 委員会の開催

日時：2025年2月10日（月）

開催方法：対面と Web

議題：1）2024年度事業活動報告について
 2）2025年度事業活動計画案について

5. 今後の課題

関係諸団体の活動状況の把握をさらに進め、必要な提携・協力及び支援活動を企画・実施に移す。

広報委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○鎌田 佳奈美 摂南大学 宮城 由美子 福岡大学

1. 会報第 51 号・52 号の発刊

(1) 会報第 51 号は 2024 年 5 月 1 日に発刊

- ① 2023 年度事業活動報告
- ② 会員校の特色ある取り組みの紹介
- ③ 愛知県地区活動プロジェクトの報告
- ④ 理事会報告
- ⑤ 事務局からのお知らせ

(2) 会報第 52 号は 2024 年 11 月 1 日に発刊

- ① 会長挨拶
- ② 新規会員校紹介
- ③ 社員総会付帯事業講演会
- ④ 2024 年度研究助成事業の選考結果報告
- ⑤ 役員一覧
- ⑥ 社員総会 / 理事会報告
- ⑦ 事務局からのお知らせ

2. ホームページ

ホームページの利用状況を定期的に分析し現状を把握して、課題に対する改善策を検討している。

3. 2023 年度年次報告書の発刊

2024 年 6 月に発刊

4. 委員会の開催

第 1 回広報委員会

日時：2024 年 4 月 22 日（月）14：30～15：40

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

参加者：鎌田 佳奈美、濱中 喜代、守田 美奈子

コーディネア（株）河口氏

- 議題：1) 看護学を学ぶ魅力発信事業について
2) ホームページについて
3) 2024 年度事業活動計画について

第 2 回広報委員会

日時：2024 年 7 月 24 日（水）～25 日（木）

開催方法：メール会議

参加者：鎌田 佳奈美、濱中 喜代、守田 美奈子

議題：1) ホームページについて

(1) アクセスレポートの報告

(2) 会員校情報ページの改修案について

2) 会報第 52 号の記事構成について

第 3 回広報委員会

日時：2024 年 8 月 28 日（水）10：00～10：45

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

参加者：鎌田 佳奈美、宮城 由美子

議題：1) 2024 年度委員会活動について

2) 会報第 52 号について

3) ホームページについて

4) スケジュール

第 4 回広報委員会

日時：2024 年 11 月 5 日（火）11：00～12：00

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

参加者：鎌田 佳奈美、宮城 由美子

コーディネア（株）河口氏、中井氏

議題：1) ホームページについて

2) 2024 年度事業活動報告、会計内訳について

3) 2025 年度会報の電子化について

第 5 回広報委員会

日時：2025 年 1 月 29 日（水）11：00～12：00

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

参加者：鎌田 佳奈美、宮城 由美子

コーディネア（株）中井氏

議題：1) ホームページについて

2) 会報第 53 号について

3) 2024 年度事業活動報告、会計内訳について

4) 2025 年度事業活動計画、予算について

5. 今後の課題

- 1) 協会全体の計画と方針を基に看護の魅力を社会に発信するための広報活動の検討を行う。
- 2) HP に関する定期的な業者との打ち合わせ会議を継続すると同時に、迅速かつ適切な情報配信を行うことで HP の充実を図る。
- 3) 会報発行（年 2 回）を継続すると同時に、さらなる紙面の充実を図り、電子化について継続検討する。

将来構想検討委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○原 玲子	日本赤十字秋田看護大学	鎌田 佳奈美	摂南大学
洪 愛子	神戸女子大学	櫻井 しのぶ	順天堂大学
(委員) 坂本 真理子	愛知医科大学	島袋 香子	北里大学
長澤 正志	淑徳大学	三国 久美	北海道医療大学

1. 委員会の開催

第1回将来構想検討委員会

日時：2024年11月20日（水）～30日（土）

開催方法：Webおよびメール会議

議題：私立看護系大学将来構想研究機構（仮称）の設置に向けた検討

- ・2023年度の理事会において、私立看護系大学に関する課題を踏まえ、本協会として、私立看護系大学に関する統計データや分析を進めて、協会として政府に要望する根拠をより明確にするため、私立看護系大学将来構想研究機構（仮称）の設置や具体的な運用方法などを継続して検討する方針が示され、設置の可能性を探索するための検討を2024年度委員会に引継がれた。
- ・2023年度将来構想検討委員会よりこれまでの経緯や背景などについて確認を行った。意義、実現可能性、設置後の成果や運営などを考慮し、設置の是非を含め検討する必要がある、第3回定例理事会において報告した。
- ・今期の委員会では、研究機構設置の実現可能性、運営における継続性等について、本協会における予算

規模で、研究員や事務局の人材を確保し、独立して安定した運営が可能であるか、会長の兼任が可能であるか等を検討した。機構の実現可能性および継続した運営の可能性を視野に入れた場合、設置は慎重に考え、当面、凍結することとなった。

第2回将来構想検討委員会

日時：2025年2月10日（月）

開催方法：対面とWeb

議題：(1) 2024年度事業活動報告について

(2) 2025年度事業活動計画案について

本協会の役割と機能の強化に向け、私立看護系大学がもつ課題の明確化と今後の方策について検討した。

2. 今後の課題

会員校は、看護の質向上や人材育成だけでなく、地域住民の健康支援を行う役割を担っており、感染症の流行や災害等の発生時には住民の健康危機に対応すべく尽力している。会員校の更なる連携と協力を推進させるために求められる本協会の事業活動を検討する。

また、少子化の進行に伴う志願者の減少など私立看護系大学を取り巻く厳しい現状がある。今後の私立看護系大学のあり方について検討が必要である。

地区活動委員会

担当理事および委員（○：委員長）

○篠崎 恵美子 人間環境大学 池田 恵美子 四国大学
 (委員) 坂本 真理子 愛知医科大学 坂 亮輔 人間環境大学
 渡部 光恵 四国大学

1. 地区活動プロジェクト

会員校の地区における協働を進め、看護学教育の発展に寄与する新たな活動の在り方を探索することを目的とし、各地区の会員校の協働活動に助成を行った。8月31日から10月1日に募集を行い、4件の応募があった。申請内容と予算を精査し、妥当な助成額を決定し、4件を採択とした。

●北海道・東北地区

プロジェクト名：暮らしの場で学ぼう！～看護職員
 卒後フォローアップ研修～

協働する会員校：北海道医療大学看護福祉学部看護学科、天使大学看護栄養学部看護学科、日本医療大学保健医療学部看護学科、北海道科学大学保健医療学部看護学科、北海道文教大学医療保健科学部看護学科

●中部地区

プロジェクト名：大学教員対象 オープンキャンパス
 「他大学をみてみよう！」

協働する会員校：愛知医科大学看護学部看護学科、一宮研伸大学看護学部看護学科、金城学院大学看護学部看護学科、相山女学園大学看護学部看護学科、中部大学生命健康科学部看護学科、豊橋創造大学保健医療学部看護学科、名古屋学芸大学看護学部看護学科、名古屋女子大学健康科学部看護学科、日本福祉大学看護学部看護学科、人間環境大学看護学部看護学科、藤田医科大学保健衛生看護学部看護学科

●中部地区

プロジェクト名：WEB 看護学科訪問～看護の授業を
 AI アバターと一緒に体験しよう！～

協働する会員校：富山福祉短期大学、金沢医科大学

●関西・近畿地区

プロジェクト名：おおさか・臨地実習にかかわる教員
 と臨床指導者 FD 研修プロジェクト

協働する会員校：関西医療大学、千里金蘭大学、藍野大学、大阪成蹊大学、大阪信愛学院大学、四條畷学園大学、摂南大学、梅花女子大学、大阪青山大学、森ノ宮医療大学

2. 地区会議の開催

当番校（四国大学）が企画を担った。

日時：2024年12月21日（土）10：00～13：30

開催方法：対面と Web によるハイブリット

開催場所：ホテルグランフォーレ（愛媛県四国中央市三島朝日1丁目1-30）

議題：「入学前教育のあり方」

対象：四国地区の会員校5校

当日参加者：会場参加10名、Zoom参加1名

活動報告：

日本私立看護系大学協会四国地区の会員校5校が集まり、入学前教育に関する課題や取り組みについて、意見交換を行った。各大学の現状や課題を共有し、学生の学習習慣や基礎学力の向上、早期合格者のモチベーションの維持などが主な話題となった。

高校との連携や入学後の学習との関連性についても議論され、学生の基礎学力、読解力の改善、などの様々な観点から意見を交換し、効果的な看護学教育の在り方についても検討した。

入学前教育の効果的な内容や方法について、高校での学習と大学での学びをつなぐ内容の重要性を確認し、課題の効果的な提示方法や、難易度や頻度、提出方法について意見が交わされ、eラーニングなど様々な学習形態、実施時期、対象者、費用負担などの情報を共有した。

学生の学習習慣の定着や基礎学力向上が課題として挙げられ、eラーニングでは進捗確認が可能であり学習傾向を把握するための取り組みも行われているとの情報提供もあった。また、全学で統一した取り組みとなると、看護学部としての課題の目的や意義を明確にすることが難しいとの意見がある一方、看護や医療に特化した生物や数学などのコンテンツを提供していることも言及された。

入学後の学生の読解力不足と学習習慣の未定着の問題についても議論された。多くの学生が長文を読むことや問題文を最後まで読むことが苦手であり、これが

国家試験や学業全般に影響を与えていると懸念が示された。他にも以下について話し合われた。

- ・災害時の学生の安否確認システムや対応方法について
- ・実習期間中に災害が起きた場合の実習先との連携について
- ・災害発生時に備えた平時からの大学間の関係構築の重要性について
- ・実習時のスマートフォン使用ルールについて
- ・チャット GPT などの AI ツールの適切な使用方法について
- ・電子教科書やデジタル機器の導入について

3. 委員会の開催

第1回地区活動委員会

日時：2024年8月25日（日）12：30～13：50
会場：JW MARRIOTT NARA（奈良県奈良市三条大路1-1-1）

出席者：（理事）池田恵美子、篠崎恵美子
（委員）坂亮輔

議題：1) 2024年度委員会活動
2) 助成事業について
3) 地区会議の開催について
4) その他

第2回地区活動委員会

日時：2024年10月10日（木）17：00～18：00

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

出席者：（理事）池田恵美子、篠崎恵美子

（委員）坂本真理子、坂亮輔、渡部光恵

議題：1) 助成事業の採択

2) 地区会議（四国）の開催について

第3回地区活動委員会

日時：2025年1月27日（月）13：00～14：30

開催方法：Zoom を用いた Web 会議

出席者：（理事）池田恵美子、篠崎恵美子

（委員）坂本真理子、坂亮輔、渡部光恵

議題：1) 2024年度事業活動の振り返り

2) 2025年度事業活動計画案について

（1）助成事業について

（2）地区会議について

3) 今後のスケジュール

4) その他

4. 今後の課題

地区活動の在り方、各活動を会員校へ周知していく方法を検討する。

2024 年度特別事業

1. ポストコロナにおける看護学教育推進事業

2024 年度、本協会は看護学教育の質の維持向上や地域の健康支援に奮闘している会員校と共に、新たな時代に向けた看護学教育を推進することを目的とし、特別助成事業としてポストコロナにおける看護学教育推進事業を実施しました。会員校が助成を受けられる機会は1回、金額は10万円です。

応募期間は2024年7月17日から9月30日までとし、209校中140校より申請があり140校に助成しました。助成を受けた会員校から助成金の使途と会計内訳の報告を受けました。

(主な申請内容)

- ・日本看護学教育評価機構への入会、受審
- ・看護学教育機関ならびに実習施設を含めたICTの活用体制の整備（クラウド型の臨地実習記録システム導入・運用経費への支援等）
- ・看護学教育のためのシミュレーション機器等の充実整備と教育支援の体制整備
- ・看護教員の養成と雇用および臨地実習施設における教育要員の配置
- ・CBT 試験の導入、整備のための費用
- ・学修成果可視化システム等にかかる費用
- ・臨時実習等に係る消耗品等の購入

2. 看護の魅力発信事業

中高生と進路選択の際のキーパーソンである高校の進路指導の教員や保護者を対象に看護学を学ぶ魅力を発信するとともに、会員校の広報活動を支援する看護の魅力発信事業を実施しました。

(1) 広告動画の作成と SNS での展開

看護の魅力と多様性を表現した動画を作成し、SNS（Instagram、TikTok、YouTube）で公開しました。動画から本協会の会員校情報ページへ遷移させ、各会員校（看護学部）への流入を促進させることが狙いです。

配信期間

TikTok、Instagram：2月3日から4月28日まで

YouTube：2月7日から4月28日まで

（主な対象者：人文科学・社会学・教員養成／教育学・生活科学・保健衛生学・理学・薬学を志望する高校1・2年生）

(2) 特設 Web ページの公開

2月4日より本協会ホームページに「看護の多様な

可能性」の Web ページを公開しました。2月14日からは株式会社ベネッセコーポレーションのマナビジョン内の職業検索ページと連携させて看護を志望する中高生やその保護者を本協会ホームページの会員校情報ページへ誘導し、各会員校（看護学部）Web ページへの流入を促します。

(3) 探究学習を接点とした高校へのアプローチ

2022 年度から高校の授業に本格導入された高校の新たな科目「総合的な探究の時間」での探究活動を通じた訴求として、「総合的な探究の時間」の副読本冊子『探究×SDGs－地域課題解決とキャリア』（朝日新聞社）に看護と社会課題を語る記事を掲載しました。「探究学習」を通じて将来の学びと看護の魅力を接続させることが狙いです。生徒が自分にとって関わりの深い課題として看護を探究するきっかけを作り、看護大学の情報にアクセスし看護職を目指す学生を増やすことを目的としています。

高校の探究学習では、生徒の主体性が重視され、自分にとって身近なテーマを課題として設定することが理想とされています。その点で、看護分野は探究学習のテーマとして適している可能性があるため、看護と身近な社会課題や隣接する学問系統との結びつきを示す記事内容としました。18,550 冊、2,525 校の学校へ配布されました。

（Web 版：<https://www.asahi.com/ads/tankyu-sdgs/>）

(4) 会議の開催と概要

2024 年 4 月 22 日：キックオフ会議 対象者、実施内容の検討

7 月 8 日：動画広告クリエイティブの方向性について

7 月 12 日：役員交代に伴う本事業の引継ぎ

8 月 5 日：「探究×SDGs」副読本教材企画テーマについて

9 月 4 日：事業概要の詳細検討、朝日新聞社の副教材の取材、記事校正、写真、図表修正のメール審議を重ねた。

9 月 30 日：動画について、職業紹介について検討し、以後メール審議を重ねた。

11 月 11 日：今後の進行について再検討、進捗の確認

12 月 6 日：キャラクターデザインの確認、副教材記事内容の確認と修正、動画配信設定の検討、看護の魅力 Web ページの構成とデザイン検討

2025 年 1 月 8 日：動画仮編集、ナレーション音声確認、マナビジョンバナー確認、Web 広告セグメント配信期間確認、Web ページの確認

「瀬戸内イキイキプロジェクト」

活動報告

広島国際大学 看護学部看護学科

山田 智子／岡本 亜耶子

はじめに

本学は健康・医療・福祉分野の総合大学として、「時代と地域が求める真のフィールドスペシャリスト」の育成を目指している。このような大学で学ぶ学生たちの強みを生かし、地域社会に笑顔と健康を届ける学生団体「瀬戸内イキイキプロジェクト」の活動について報告する。

1. 瀬戸内イキイキプロジェクトとは

高齢化が進む瀬戸内海の島嶼部で、島の人々が生き生きと暮らし続けるための生きがい支援と地域活性化を目的とした課外活動団体であり、5つの目標を掲げている。

- ① 瀬戸内の島の高齢者が住み慣れた地域で自立した暮らしを続けられるよう、健康面のサポートを行う
- ② 島の高齢者と交流し、元気と笑顔の場づくりをする
- ③ 島の特徴を知り、島での暮らし方や高齢者の思いを理解する
- ④ 島の魅力をSNSなどで紹介することにより、地域活性化に協力する
- ⑤ 活動を通して主体性やチームワーク力、課題解決能力などの社会人基礎力を身につける

メンバーは看護学科の他、薬学科と医療栄養学科の学生で構成され、主に2年生が幹部としてプロジェクトを運営している。顧問は看護学科教員2名である。活動の資金は大学や自治体からの助成金で、毎年大学が募集する「地域活性化支援プロジェクト」に応募し採択されている。活動の拠点は豊田郡大崎上島町と呉市豊浜町で、社会福祉協議会やまちづくり協議会と連携して活動している。

2. プロジェクト発足の経緯

看護学科の学生が老年看護学実習で大崎上島町に住む高齢者と出会い、島で暮らす人々が培った生活の知恵に学び、高齢者が生き生きと暮らす活力の源は何かという興味を抱いたことから始まった。活動は2024年で11年目を迎えた。

3. 活動内容

1) ふれあいサロンへの参加

プロジェクトの主軸となる活動で、定期的に行われる島のふれあいサロン（高齢者の介護予防や生きがいづくり、孤立防止などを目的とする交流の場）に参加し、学生による健康教育や健康チェック（血圧、脈拍、SpO₂、握力などの測定）、健康レシピの紹介、会食を行う。健康教育は学生が作成したスライドやパンフレットを用い、転倒予防や認知症予防、災害時の備えなど高齢者に役立つ健康情報を提供している。健康レシピは本学医療栄養学科教員の指導を受けながら学生が考案したレシピで、①健康教育に関連した内容にする（例：便秘予防の健康教育に基づいた、食物繊維の多い食材を使用したレシピ）、②島の特産品を用いる、③高齢者の特徴や生活に合わせ材料や手順を簡潔にする、といった工夫が施されている。

2) 島のイベントへの参加

島のお祭りでは、プロジェクトの活動紹介とともに、島の特産品を使用して学生が考案した「ひじき焼きそば」の試食を提供している。また、グラウンドゴルフ大会やみかん狩りへの参加を通じて、島の文化に触れながら高齢者との交流を深めている。

3) 島の理解を深める活動

島と島で暮らす人々を理解し、島の魅力と課題を発見することが目的の活動である。これまでは既存の資



島のイベントに参加

ふれあいサロン
(集合写真)



ふれあいサロン（健康教育）



ふれあいサロン（健康チェック）



島の理解を深める活動（フィールドワーク）

料を用いて学内でグループワークを行っていたが、2024年度は島でのフィールドワークに変更し、ふれあいサロンや島のイベントに参加する前に実施した。実際に現地を訪れ様々な景色を見ながら町を探索することで、学生たちは活動の対象となる高齢者の暮らしを具体的にイメージできるようになり、地域の課題やニーズに気づきやすくなった。この経験は、ふれあいサロンや島のイベントで対象者と会話する際のきっかけになるだけでなく、今年度の健康教育にも繋がりをみせた。

4. 活動を通して得られたもの

対象である高齢者は、「久しぶりに若い人たちと交流できて楽しかった」「元気をもらえた」など、学生との交流に対する満足度が高い。活動の拠点である両島には中学校または高校までしかなく、普段、触れ合うことのない大学生との世代間交流は島の高齢者にとって貴重な時間であり楽しみの一つになっているこ

とが伺える。他には「血圧が高めなので気を付けたい」や「健康教育で教わったことを実践したい」など、健康意識の高まりを示す反応もあった。

一方で学生たちは、高齢者の特徴に合わせたコミュニケーションの取り方や分かりやすい資料作成・説明の工夫など、対象者の立場に立って考え行動することの重要性を学んでいた。また、「ありがとう」「また来てね」などの言葉をかけられることで、人の役に立ち感謝されることの喜びを感じていた。その他にも、リーダーを務めた学生は、報告・連絡・相談の徹底や計画性・主体性を持って行動することの大切さを学んでいた。

おわりに

島嶼部に暮らす高齢者を対象とした地域貢献活動は、対象者と学生双方にとって意義深い活動である。学業や臨地実習との両立が難しいといった課題もあるが、貴重なこの活動を末永く続けていきたい。

大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト 地島における防災・減災活動 報告

日本赤十字九州国際看護大学

緒方 文子（ヘルスプロモーション領域）

はじめに

日本赤十字九州国際看護大学は、学校法人日本赤十字学園が全国に設置する大学のひとつで、九州地区の看護教育の拠点として、2001年に福岡県宗像市に開学しました。地域社会との連携を重視し、看護教育を通じて地域貢献を積極的に推進しており、その一環として、宗像市と協働で地域の課題解決に取り組む活動にも力を入れています。

大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト（以下、まちプロ）は、大学生の柔軟な発想や大学の研究成果を地域の課題解決及び魅力向上につなげることを目的に、本学の所在地である宗像市が令和3年度から取り組みを開始した協働事業です。本稿では、この活動の概要について紹介します。

学生が本活動の拠点としている地島（じのしま）は、福岡

県宗像市鐘崎の北西海上2.0 kmに位置する、面積1.57 km²の離島です。ワカメ、ウニ、アワビなどの磯漁業や釣り漁業が盛んで、春には約6,000本の藪椿が美しく咲き誇ります。島内には泊地区と豊岡地区の2つの集落があり、神湊港渡船ターミナルから泊港まで約15分、白浜港まで約25分でアクセスできます。令和4年7月時点での人口は137人で、高齢化率は48.9%となっています。地理的な特性から、災害時に孤立するリスクが高く、加えて高齢化が進んでいることから、地域住民が主体的に防災・減災に取り組む必要性が一層高まっています。このような背景から、日本赤十字九州国際看護大学は、これまで培ってきた知識や経験を活かし地域住民の自助力を高めるため、学生による防災・減災活動を開始しました。

1. 4年間の活動紹介

年	活動テーマ	活動目的	活動状況（対象・方法・結果）	現状と課題
1年目	迫りくる異常気象！ 離島における災害対策とは？	・避難所HUG・防災教室を実施し、島民の防災意識を高める	対象：島民全体 方法：地島の現状調査、島民ヒアリング、避難所HUGの導入検討、防災教室の企画 結果：地区踏査を実施し危険箇所や避難所等の見学、それぞれの自治会長へのヒアリング	・ヒアリングの結果、これまで被害を受けたことがないため、防災意識は低かった。 ・新型コロナウイルスの影響で避難所HUGと防災教室は中止となった。
2年目	Let's 防災教室島民の方々と日赤生がつながる！ in 地島	・島民同士の結びつきが強いことを活かして自助を高める ・地域のキーパーソンから島民へ、防災・減災の意識を広める	対象：自治会長、民生委員、消防団員 方法：災害時の食事の備えに関する防災・減災教室を開催 結果：備蓄食の準備について選択方法や購入できる場所や金額についての情報提供、代替品の準備、備蓄食を試食してもらい組み合わせや味付けなどを確認	・大学と地島の漁業スケジュールが合わない時期が多く、日程調整に苦慮した。 ・対象者の年齢層が想定よりも若かったため教室の難易度をもう少し高めに設定しても良かった。 ・次年度は島民全体を対象とした教室を開催してもらいたいと希望あり。
3年目	地島の皆さんと一緒に 防災・減災教室！ 広がれ地域の防災・減災の輪	・島民全体の防災・減災に対する意識を高める	対象：島民全体 方法：防災グッズの使い方、備蓄食の試食、避難経路の確認など体験型の防災教室を実施。地島小学校と連携し宗像市総合防災訓練に参加。活動の様子をSNS等で情報発信。 結果：備蓄食を試食したことで食感や味付けなど自分に合っているか確認することができた。代替品の準備についてイメージすることができた。 その他：避難所となる小学校に防災グッズ一式を贈呈し廊下に展示コーナーを設けた。「ふくおか地域づくり活動賞」を受賞	・教室を3つのグループに分けて開催したため、メンバー間で動きが異なり、情報共有が疎かになった。 ・参加者が幼児から高齢者までと年齢層が広く、言葉の伝え方に難しさを感じた。 ・事前に回覧板で行った申し込みでは少なかったが、当日参加者が多かったため物品の準備で手間取った。
4年目	作る！備える！守る！ ～みんなが学ぼう防災・減災教室～	・小学生を対象を絞り、年齢や理解力に応じた防災・減災の準備ができる	対象：小学生 方法：身近な物を活用した防災術の紹介。新聞紙でのお皿・スリッパ作り、ペットボトルランタン作り、応急処置体験、防災ボットの紹介。 結果：体験型の教室にしたことで参加した小学生は楽しみながら学習していた。小学生でも自分で備えができることを実感していた。 その他：普段から防災・減災について意識できるように防災グッズを贈呈した。国際シンポジウムでの発表 JICA 研修生への講義	・本土から離れているため最新の防災グッズを準備することはハードルが高い。 ・小学生が本土への移動手段が船であることも踏まえた上での代替品となる物品について考える時間を設けるべきだった。 ・地島の特徴や本土とのアクセスを踏まえた内容にするために「対象に応じた」について再度考える必要がある。



新聞紙でスリッパ作り



危険箇所探し



JICA 研修生への講義



「ふくおか地域づくり活動賞」授賞



ペットボトルランタン



スリーピングパッドの準備



地区視診



国際シンポジウム

2. 4年間の活動を振り返って

4年間の活動を通して、学生たちは地域住民の防災意識向上に貢献するとともに、自らも大きく成長しました。コロナ禍での活動制限や離島という地理的条件、スケジュール調整の難しさなど多くの課題に直面しましたが、メンバーシップやリーダーシップを発揮し、一つひとつ乗り越えてきました。現在では20名を超える学生が所属するプロジェクトとなり、その活動は地域にも認められるようになりました（ふくおか地域づくり活動賞）。

活動を通して得られた最も大きな成果は、学生たちが地域住民と信頼関係を築き、コミュニケーション能力やプレゼンテーションスキルを向上させたことです。当初は電話での問い合わせにも緊張していた学生たちが、徐々に自分の言葉で話せるようになりました。また、地域に根ざした視点を養い、病院実習の際には患者さんの生活環境を理解することの重要性を実感するなど、看護師として地域包括ケアを担うための基盤を築きました。特に、上級生が下級生を指導する体制は、下級生にとって良い学びの機会となり、上級生の成長にも繋がっています。この活動を通しての学びは、大分県立看護科学大学の「看護学生による高齢者への予防的家族訪問実習」¹⁾と同様の成果が得られており、継続的な訪問や地域との連携、世代を超えた交流が重要であることを示唆しています。

これまで実施してきた体験型の防災・減災教室は、参加した島民に楽しみながら学んでもらうことができ、防災訓練への参加や情報発信を通じて、地域全体の防災意識を高めることができました。例えば、ある学生は、教室で島民の方から「自分たちのために真剣に考えてくれて嬉しい」という言葉をかけられ、活動の意義を改めて実感したと語っています。避難所となる小学校への防災グッズ贈呈や展示コーナー設置も、地域住民の防災への関心を高めるきっかけになったのかもしれません。

これらの活動を通して得られた経験は、学生たちの成長や地域への貢献のみならず、大学にとっても貴重な財産となっています。地島での活動をきっかけに、予防活動に関心を抱

き、保健師課程を志望する学生や、卒業研究のテーマとして地域防災を選ぶ学生も現れました。中には、この活動に魅力を感じて入学を決めた学生もあり、活動の輪はさらに広がっています。

もちろん、活動は常に順風満帆だったわけではありません。活動を実施するにあたり、参加者の年齢層が幅広く、言葉の伝え方に工夫が必要なことや、運営面での課題もありました。これらの課題を克服し、より質の高い活動を目指すために、今後も改善を重ねていきたいと考えます。

3. 今後の展望

今後は、4年間で培った経験を活かし、地島の方々に寄り添った活動をさらに発展させていきたいと考えています。具体的には、以下の3つの方向性で活動を展開していきます。

第一に、これまでの活動を継続しつつ、地島の方々のニーズに合わせた新たな防災・減災プログラムの開発を目指します。例えば、備えが進んでいない現状を踏まえ、災害時に必ず必要となるトイレ問題に着目し、携帯トイレの準備や使用方法、衛生管理などについて学ぶワークショップなどを実施することを検討しています。トイレの設置場所については、引き続き島民の皆さんと共に検討していきたいと考えています。

第二に、教室を開催していない時期においても、島民が自主的に災害について考えることができるように支援していきます。例えば、災害発生時の連絡方法や、小学校教職員不在時の避難所設営及び運営について、島民の皆さんと共に検討していくことを考えています。

第三に、学生たちが地域で主体的に活動できる機会を増やし、リーダーシップや問題解決能力を育成します。また、国際シンポジウムやJICA研修生への講義など、引き続きグローバルな舞台での発表機会を設けることで、学生の視野を広げ、地域を越えた学びへと繋げていきます。これらの活動は、学生たちの視野を広げるだけでなく、地島での活動を海外に発信する機会にもなり、日本における地域防災の取り組みを広める上で重要な役割を果たすと期待できます。

これらの活動を通して、地島における防災・減災の輪をさらに広げ、安全・安心な地域づくりに貢献できるよう、学生・教職員一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

1) 看護学生による高齢者への予防的家族訪問実習：保健師ジャーナル第75巻第3号、P238-244、影山隆之、緒方文子、篠原彩、村嶋幸代

2024 年度国際学会発表助成 論文要旨

Demonstrating telemedicine in surgical care with a mobile treatment unit and 5G (Vol. 1) : A Focus on the Role of Nurses

Ikuko Kashiwazaki¹⁾ / Naoko Inanobe¹⁾ / Kou Suzuki¹⁾ / Yoshifumi Morihiro²⁾ / Yuki Horise²⁾ / Yuya Aoki³⁾ /
Youchen Lu²⁾ / Takuya Okawa²⁾ / Shuji Kitahara⁴⁾ / Kitaro Yoshimitsu⁴⁾ / Ken Masamune⁴⁾

- 1) School of Nursing, Tokyo Women's Medical University (TWMU), Tokyo, Japan
- 2) Mobile Innovation Tech Department, NTT DOCOMO, INC., Tokyo, Japan
- 3) Radio Access Network Design Department, NTT DOCOMO INC., Tokyo, Japan
- 4) Faculty of Advanced Techno-Surgery (FATS), The Institute of Advanced Biomedical Engineering and Science (ABMES), TWMU, Tokyo, Japan

Aims: The mobile Smart Cyber Operating Theater (SCOT), jointly developed by TWMU and NTT DOCOMO, Inc., is a system designed to provide medical treatment and support in both normal and disaster situations. Utilizing 5G and a multi-access cloud, this system enables surgeons and nurses in remote locations to share medical information, including patient images and data, facilitating rapid decision-making. This presentation aimed to assess the results of demonstration experiments for the system's implementation and elucidate the role of nurses in telemedicine.

Methods: In disaster scenarios, demonstration experiments for telemedicine in surgical care were conducted using simulated patients with femur fractures, mandible fractures, and colon injuries. During these remote simulated surgeries, the local nursing team consisted of one circulating and one scrub nurse, mirroring standard surgical practice. Additionally, a survey on the role of nurses in telemedicine was conducted through interviews with three nurses who participated in the simulations.

Results: Scrub nurses providing direct assistance prepared surgical instruments, maintained the surgical field, and assisted the operating surgeon with instrument handling and

surgical procedures. Simultaneously, they received immediate instructions from remote physicians based on high-resolution images and followed those instructions to ensure procedural safety. Circulating nurses monitored the patient's overall condition based on communication and contributed to safe anesthesia management and patient comfort by accurately reporting to remote physicians and sharing relevant information.

Conclusions: Achieving "real-time responsiveness" and preventing "loss of medical information" require effective information sharing between physicians, who monitor vital sign data, and nurses, who directly interact with patients. Although high-resolution images could be shared in real-time, verbalizing both the visible information and the challenges encountered was still necessary to effectively communicate with remote locations. Timely reporting on patient conditions fosters high coordination and immersion between remote and on-site teams.

発表学会 : 28th East Asian Forum of Nursing Scholars
発表場所 : Korea
発表日 : February 13-14, 2025

Characteristics of Career Vision and Career Development Support for Mid-Career Nurses : From the Perspective of Determinants of Sub-Concepts of Occupational Career Maturity

Shihori Tagawa¹⁾ / Kayo Mizobe¹⁾

- 1) Faculty of Health Sciences Department of Nursing, Japan HealthCare University, Japan

Aims: Autonomous career development is a professional responsibility. This study analyzed the characteristics of career vision and development support for mid-career nurses, focusing on occupational career maturity.

Methods: Eleven nurses with 5–19 years of experience were interviewed, and their responses were analyzed using qualitative inductive analysis. The results were evaluated based on the determinants of the subcategory of occupational career maturity and categorized into eight types: (a) interested, autonomous, and planning; (b) interested, autonomous, and not planning; (c) interested, not autonomous, and planning; (d) interested, not autonomous, and not planning; (e) not interested, autonomous, and planning; (f) no interest, autonomy, and no planning; (g) no interest, autonomy, and planning; (h) no interest, autonomy, and no planning. This study was approved by the Ethics Review Committee of the author's university.

Results: The career vision of mid-career nurses revealed the following themes: [Various prospects as a nurse (a)], [Taking

action to achieve future goals (a)], and [Uncertainty in career direction owing to a lack of planning (a, b, c, d, h)]. The current state of career development support identified: [Influence on career choice (a, c, d, g, h)], [Influence from colleagues and model nurses in the workplace (a)], [Career advancement support from head nurses (a)], [Workplace support for career advancement (a, c, d, g)], [Attending training focused on career education (a, d, h)], and [Experiences outside the workplace that enhance career awareness (a)].

Conclusions: Occupational career maturity regards individual cognitive processes and can be transformed through work experiences—characteristics requiring intervention were identified.

Keywords: Mid-Career Nurses, Occupational Career Maturity

発表学会 : 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars
発表場所 : Korea
発表日 : February 13-14, 2025

Care Needs of Women Who Have Given Birth to Twins: Assessing the Impact of Assisted Reproduction and Miscarriage Experience

Mihoko Fujii¹⁾ / Keiko Aizawa²⁾ / Yuki Yonekura²⁾

1) Faculty of Medical Sciences, Department of Nursing, Teikyo University of Science, Tokyo, Japan

2) Graduate School of Nursing Science, St. Luke's International University, Tokyo, Japan

Background

The psychological landscape of women who undergo twin pregnancies after ART is intricate, presenting distinctive psychological characteristics compared to women experiencing spontaneous pregnancies (Fujii, 2014). This study analyzed the care needs of women who have given birth to twins to determine the impact of ART and the experience of miscarriage on their care needs.

Methods

A web-based survey using Google Forms was conducted among women who had given birth to twins belonging to a national multiple birth circle or who used postnatal care at a midwifery center. The survey form was based on an inductive study (Fujii, 2020) that examined the care expectations of women with twin pregnancies after ART and was developed after consultation among the study's contributors. Women were asked about the strength of their preferences for the 28 care items they desired, using a five-subject method. The data collection period was between July 2021 and December 2022. Further, it was conducted with the approval of the Ethics Committee for Persons at the researcher's institution.

Results

A total of 249 women (valid response rate: 98.6 %) who gave birth to twins were included in this analysis. Among the participants, 133 had undergone ART, and 45 had experienced miscarriage.

A t-test was conducted with two groups: those with or without ART experience and those who had experienced a miscarriage compared to those who had not. The score for "care desired from midwives and nurses from the time of delivery until discharge from the hospital" was significantly higher in the group with miscarriage experience compared to the group without miscarriage experience. For "care desired from midwives and nurses during pregnancy" and "care desired from midwives and nurses from birth until discharge from hospital," the group with ART experience exhibited higher care needs scores compared to the group without miscarriage experience, with the difference being statistically significant.

Conclusions

Among women who have given birth to twins after ART, those who have experienced miscarriage exhibit exceptionally high care needs, underscoring the importance of comprehending their ART history.

This study was supported by a JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (Grant-in-Aid for Scientific Research C; Project No. 21K10860).

発表学会：15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars

発表場所：Korea

発表日：February 13-14, 2025

2025 年度助成事業について

研究助成事業

応募期間：4月1日～5月20日

看護学研究者の育成と、さらなる向上発展を奨励するため、以下の3つの研究助成事業を行います。
1 会員校あたり各助成1件の申請ができます。また、1名につき1つの助成への申請が可能です。

1. 看護学研究奨励賞

(1) 対象者：会員校の本務教員※で、2024年4月1日から2025年3月31日までに英文による原著論文などを、国際学術誌や学術団体誌・専門誌に公表し、看護学研究に貢献した者。ただし共同研究の場合、応募者は筆頭著者であることとします。

※本務教員とは専任教員及び週5日以上出勤する有期雇用の教員

(2) 採択件数：20件程度

(3) 表彰：賞状および副賞（10万円）が授与されます。

2. 若手研究者研究助成

(1) 対象者：会員校の本務教員で、以下の要件を満たす者としてします。ただし、他機関から同一研究課題により助成が決定している場合は対象とはなりません。なお、共同研究の場合、応募者は筆頭研究者であることとします。

- ①応募時、満 45 歳以下の講師、助教および研究者番号を有する助手。
- ②研究成果について本法人主催セミナーで報告できる者。
- (2) 研究期間：採択日から 2027 年 3 月 31 日まで
- (3) 採択件数：15 件程度
- (4) 研究助成：1 件 50 万円を上限とする。(1,000 円以上の残金が出た場合は返金すること。)

3. 国際学会発表助成

- (1) 対象者：会員校の本務教員で、2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までに開催される国際学会に発表を行った者および発表予定者（演題登録が開始されていなくても発表予定であれば可能）とします。
- (2) 採択件数：10 件程度
- (3) 助成金：1 件 20 万円。(1,000 円以上の残金が出た場合は返金すること。)

学会発表の採択通知証または学会演題登録の写しなどを提出してください。採択通知証が応募時に手元にない場合は後日提出してください。

新規に国際交流活動を行うための助成

応募期間：5月9日～6月9日

国際交流活動を活性化させ、国際的に活躍できる看護人材の育成に向けた看護学教育の在り方について議論を深めるため、新規に国際交流活動を行うための視察調査等に関する活動に対し助成を行います。調査や視察に限らず、様々な国際的な取り組みも応募可能です。また、視察先は、国内外を問いません。

- 1. 採択件数
4 件程度
- 2. 助成金
1 件の予算の上限は 100 万円。(1,000 円以上の残金が出た場合は返金すること。)

地区活動プロジェクト助成

応募期間：5月9日～6月9日

会員校の地区における協働を進め、看護学教育の発展に寄与する新たな活動の在り方を探索することを目的とし、会員校の協働活動に助成を行う「地区活動プロジェクト」を実施します。地区内の会員校による協働事業であれば、どのような協働でもエントリー可能です。

- 1. 対象事業
地区内の会員校による協働事業とします。
- 2. 採択件数
4 件程度
- 3. 助成金
1 件の予算の上限は 150 万円程度。(1,000 円以上の残金が出た場合は返金すること。)

詳細は本協会ホームページをご確認ください。
ご応募お待ちしております。

理 事 会 報 告

2024 年度 第 3 回定例理事会

開催日時：2024 年 11 月 30 日（土曜日） 15 時 00 分～16 時 15 分

審 議 事 項

1. 規程等の改正について

内容に影響の少ない軽微な改正については一括承認され、改正内容の検討が必要な箇所は個別に審議し承認された。研修会の動画配信に関する運用内規、事業活動会計取扱規程、経理規程、経理規程施行細則、出張旅費取扱規程、有期雇用職員就業規則、慶弔見舞金規程、研究助成事業施行細則を改正した。

2. 50 周年事業について

開催日は 2026 年 7 月 10 日（金）。開催形式は対面および Web のハイブリッド形式とし、記念講演、シンポジウム、記念誌発行、懇親会を企画し、50 周年記念事業準備委員会は執行部理事が担うことが確認された。

報 告 事 項

1. 各委員会事業活動報告及び会計内訳

事業活動報告書と会計内訳に基づき、大学教育委員会、研究活動委員会、国際交流委員会、大学運営・経営委員会、渉外委員会、広報委員会、将来構想検討委員会、地区活動委員会の事業活動報告があった。

2. 2024 年度特別事業について

ポストコロナにおける看護学教育推進事業の実施状況の報告があった。また、看護の魅力発信事業について、将来的には訴求対象を拡大することを検討することも大切であるが、SNS 利用の年齢制限や若年層の社会的課題にも配慮が必要であり、今回は高校生をメインターゲットとして活動を進めていくこととした。

3. 中期決算書について

執行率は例年とほぼ同様の推移であり、全体的には適切な執行率であると説明があった。

4. 会長表彰の副賞について

2024 年度の会長表彰の副賞は図書カード 5,000 円分と報告があった。これまで副賞であったナースばさみは、多くの学生は既に持っており物価上昇の影響からも取りやめることとした。

2024 年度 第 4 回定例理事会

開催日時：2025 年 2 月 28 日（金曜日）9 時 00 分～10 時 30 分

報 告 事 項

1. 2024 年度事業活動報告と予算執行状況について

事業活動報告書と会計内訳に基づき、大学教育委員会、研究活動委員会、国際交流委員会、大学運営・経営委員会、渉外委員会、広報委員会、将来構想検討委員会、地区活動委員会の事業活動報告があった。

2. 看護の魅力発信事業について

株式会社進研アドと協力し動画を制作・配信し、特設 Web ページでは「看護の多様な可能性」を公開した。また、高校の探究学習へのアプローチとして、朝日新聞社の副教材に看護と社会課題に関する記事を掲載し、全国 2,525 校・18,550 冊を配布した。さらに、TikTok・Instagram・YouTube で、看護の多様な可能性を示す動画広告を配信した。

3. 2024 年度決算について

事業費の執行率は 63%、管理費の執行率は 76% である。1 月 31 日時点の決算書であり、2024 年度決算は 2025 年度第 1 回定例理事会において確定する。

4. 若手研究者研究助成研究期間の延長について

2023 年度助成採択者から研究期間延長届の提出があり、委員会において現在の進捗状況、研究期間を延長した場合の具体的な研究方法や今後の見通し等について検討し延長を認めた。

審 議 事 項

1. 2025 年度事業活動計画と予算について

2025 年度事業活動計画と予算案に基づき審議した。大学教育委員会、研究活動委員会、国際交流委員会、大学運営・経営委員会、渉外委員会、広報委員会、将来構想検討委員会、地区活動委員会より説明があり、各委員会において継続検討することとした。

2. 2025 年度重点事業について

教職員を対象にした研修会の充実、地区活動、将来を見据えた本協会の組織・活動のあり方の検討の 3 点を重点事業とする。

3. 2025 年度予算案について

正式な予算の決定は次回理事会で確定するが、一般会計の収入では新たに会員校 2 校を加えた 211 校を想定して収入を計上してある。事業費は各委員会の事業活動計画に基づいて計上し、管理費は 2024 年度の実績をもとに計上する。

4. 役員候補者選挙の電子投票の導入について（役員候補者選出規程の改正）

これまでは郵送による投票であったが、郵便料が高騰しており、投票の合理化も図れることから電子投票を導入することとした。多くの学会等での利用実績があり、経費も比較的安価である株式会社東京コンピューターシステムのシステムを採用する。次に、電子投票の導入に伴う規程の改正について審議され、第 11 条第 2 項（投票及び開票）は「選挙の投票方法は、電子投票とする。」と定める案が示され承認された。

5. 名誉会長の称号授与に関する規程の改正について

名誉会長の称号の付与については、これまで 4 年以上会長として任務にあたった者に授与すると定めていたが、根拠を持たせ役員候補者選出規程に定める理事任期の上限と同じ年数である 6 年以上と改めることとする。

6. 2025 年度社員総会について

2025 年度社員総会は Web による事前説明会および議決権行使書（郵送）による決議とし、議事事項に関する説明会を 7 月 11 日（金）にインターネットを利用した遠隔会議で開催することとした。社員総会付帯事業（講演）については執行部理事に一任された。

7. 50 周年記念事業について

記念事業は 2026 年 7 月 10 日（金）に対面と Web によるハイブリッドの開催を予定している。記念講演の講師依頼はこれからのため変更の可能性がある。50 周年記念誌については歴代の会長、日本看護協会、日本看護系大学協議会などへ寄稿を依頼し、COVID-19 流行時の対応に関しても掲載する予定とした。

事務局からのお知らせ

2025 年度社員総会について

2025 年度社員総会は前年度同様に、正会員が会場に参集することなく、Web による事前説明会と議決権行使書（郵送）による決議とします。6 月下旬から 7 月初旬に、事務局より各会員校の正会員 3 名へ社員総会資料と議決権行使書を送付します。正会員は議決権行使書を返信用封筒にて事務局へ返送してください。

■議事事項に関する説明会

7 月 11 日（金）にインターネットを利用した遠隔会議で開催します。

■社員総会

会長および理事・監事等の少人数の出席者と議決権行使書により審議事項について決定します。

2025 年度研修会のお知らせ

■大学教育委員会

新任教員向け研修会「大学教育とは」

8 月 2 日（土）

看護系大学における特別な支援を必要とする学生への教育支援の実際

2026 年 1 月の土曜日開催予定

■国際交流委員会

在日外国人や来日外国人への看護（仮）

11 ～ 12 月の土曜日開催予定

■大学運営・経営委員会

効果的な学生募集と私立大学における教育の質保証

10 月 20 日（月）午後開催予定

■研究活動委員会

看護学における実装研究の具体例（仮）

9 月 13 日（土）

詳細はこちらから



2025 年度開設 私立看護系大学 (50 音順)

●植草学園大学 看護学部看護学科 定員：80 名

〒264-0007 千葉県千葉市若葉区小倉町 1639-3

●別府大学 看護学部看護学科 定員：80 名

〒874-8501 大分県別府市北石垣 82

編集後記

2025 年 3 月に看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）が決定しました。

社会から看護学士課程を修了した看護師として求められる資質・能力について一層期待され、コンテンツ基盤型教育からコンピテンシー基盤型教育へ大きく舵をとることとなります。本協会では、今後の看護教育の新たな課題の解決、看護研究への支援事業を一層強化していきます。

今回、各学校の取り組みとして地域社会における活動について、広島国際大学、日本赤十字九州国際看護大学の取り組みを紹介しています。会員校での地域社

会に向けた取り組みとして少しでもお役に立てることを願っております。

2025 年あらたに 2 校の大学看護学科が開設されました。本協会のホームページにおきましても会員校の情報が見やすくなり、看護を目指す若者がそれぞれ特色ある大学を一望できるようになっております。

これからも会員校の皆様と情報共有を行いつつ、看護学教育の発展に寄与していきたいと思っております。引き続きよろしくお願い申し上げます。

広報委員会委員 宮城 由美子

日本私立看護系大学協会会報 第 53 号

発行者：一般社団法人 日本私立看護系大学協会

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-5 翔和須田町ビル 2 階

TEL 03-6261-2071 / FAX 03-6261-2072 E-mail office@jspcun.or.jp

https://www.jspcun.or.jp/

編集責任者：鎌田佳奈美

印刷所 三美印刷株式会社